

## 水俣蘇生／悲劇をバネに新モデル構築

谷口吉光（秋田県立大学）

6月の終わりに水俣に行ってきた。熊本県水俣市。いうまでもなく日本最大の公害病である水俣病の発生地だ。

日本人で水俣病を知らない人はほとんどいないだろう。そのイメージは悲劇的で重苦しい。ところが、その水俣が現在、環境モデル都市として蘇（よみがえ）ろうとしているという。再生している水俣の姿を自分の目で見てみたい。折りよく開かれた環境社会学会のセミナーを機に、そんな思いを込めて訪れた。

確かにすばらしい取り組みが行われていた。家庭系ごみの23種類の分別、行政による国際標準化機構（ISO）環境マネジメントシステムの普及、市民ボランティアによる環境教育ツアーなど、そのへの自治体など足元にも及ばない熱意と先進性が感じられた。

水俣蘇生の精神的支柱となったのは元市長の吉井正澄氏（72）である。「水俣病は病気に苦しむ患者だけの問題だったのではなく、患者同士、患者とそれ以外の水俣市民、水俣市民と外の人たちとの間に無数の差別と対立を生みだした」と吉井氏はいう。

しかし1992年、水俣病の教訓を訴えにブラジルの地球サミットに行った時、転機が訪れる。現地の新聞が「日本は世界各地で環境破壊を続け、それで稼いだ金を発展途上国に援助している。世界に貢献しているといっているが、世界最大の環境破壊国だ」と書いているのを見て、吉井氏は「目からウロコが落ちる思いをした」と言う。

「いくら水俣の悲劇を訴えても、自分たちがそれを克服し、水俣病を教訓にした町づくりを進めなければ説得力はない」との思いに至った吉井氏はその2年後の94年、市議会議員から市長となり、未認定患者の政治的救済、崩壊した地域社会の再生運動、環境モデル都市宣言などに奔走した。

吉井氏の講演を聞きながら、私は「これは水俣だけの話ではない。急速な近代化の弊害を抱え込んで行き詰まっている日本全体の問題だ」と思った。農業・食料・環境問題で日本が世界に対してなし得る最大の貢献というのは、近代化を克服する新しい社会モデルを構築することだろう。水俣は劇症型の公害病を引き起こしたという意味で近代日本の縮図だといわれたが、それだけでなく環境問題の地域的解決の面でも21世紀の日本の方向を先取りしているように思える。

「水俣は水俣病で世界に類のない被害を受けた町だからこそ、そのマイナスを真っ正面から受けとめ、自ら環境保全のモデル都市になることで市民の苦悩と怨念（おんねん）を昇華していきたい」

水俣の人々は過去の悲劇を受け入れることで再生への手がかりを得た。振り返って、秋田に住む私たちは、現在の衰退傾向からどのように決別できるのであろうか。

（朝日新聞「あきた時評」 2003年7月12日掲載分を加筆・修正した）